

SOA

要 なんて、 らない!?

吉松 史彰

YOSHIMATSU, Fumiaki

アマゾンジャパン株式会社
Amazon Webサービス
テクニカルエバンジェリスト

喧伝されて久しいわりにその姿が
なかなか見えてこない“SOA”とは何なのか

はじめに

「サービス指向アーキテクチャ (SOA)」は、「想定
の範囲内」と並んで、IT業界の“2005年輝け流行語大賞”
を狙える位置につけている。どちらもすっかり浸透した
([「想定範囲内」]にいたっては風化しつつある) コトバ
のように見えるが、SOAとはいったい何なのかを理解し
ている人には残念ながらなかなか出会えない。にもか
かわらず、SOAという言葉はすでに業界内を席卷し、例
によってマーケティングと広告のツールとして日常的に
使われている。タイトルにSOAを含めればイベントに客
を呼び込み、広告にSOA対応を記せば引き合いが増え
るという具合である。

一体全体、SOAとは何なのだろうか。

SOAをまじめに考える

『SOA (Service Oriented Architecture) とはビジネ
スレベルの“サービス”を組み合わせてアプリケーショ

ンの連携や統合を行なうシステム構築の考え方をいう』

[注1]

これは、『日本におけるXML、Webサービス、SOA関
連の普及啓蒙、アプリケーション開発およびシステム構
築の推進、ならびにXMLポキャブラリーの標準化を支
援する非営利団体』[注2]であるXMLコンソーシアムの、
SOA部会によるSOAの定義である。

オブジェクト指向プログラミング (OOP) の場合、オ
ブジェクトとは「データとそれに関連する振る舞いを両
方持たせたモノ」と定義される。オブジェクトに関する
定義があればこそ、それに対して「指向性を持ってプロ
グラミングをすること」という言葉に意味がある。

ところが、このSOAの定義では、サービス指向アーキ
テクチャという言葉で定義するのにサービスという言葉
を使っているが、サービスとは何なのかの定義がまった
くない。

よくわからないがサービスというヤツを連携してシス
テムを構築する考え方のことをSOAと呼ぶのである。よ

注1) http://www.xmlconsortium.org/wg/soa/soa_gaiyou.html

注2) <http://www.xmlconsortium.org/introduce/index.html>

くわからないヤツに対して指向性を持ってシステムを構築するという考え方のことをSOAと呼ぶのである。

こんな雲をつかむようにあいまいなものに、正面から取り組む意義などどこにも存在しない。SOAなんてもの（“もの”と呼べるかどうかすら疑わしい）についての解説など、実際この程度で十分だろう。

とはいえ流行語である以上、今後も多くの影響力あるベンダーとその代表者からさまざまなあおり文句が手を変え品を変え登場してくるだろうし、実際あおられてしまっている開発者も多いのかもしれない。それに、流行したということはそこに何がしかの真実が含まれていたに違いない。とすると、そこに含まれていた真実とは何だったのかを考えることには意義があるかもしれない。

システム構築業界の現実

大雑把にいつてしまえば、これまでの「システム構築」とは、単独で完結するソフトウェアを作って、納品／販売してしまうことだった。訪問だけでなく、電話、FAX、電子メールで顧客からのコンタクトを受けるようになり、紙ベースの営業日報以上の顧客管理が必要になれば、顧客管理システムを開発する。そのときクライアントサーバーが流行していれば、開発されるシステムのスタイルはVBで作られたクライアントアプリケーションとORACLEのデータベースということになり、Webアプリケーションが流行っていればWebサーバーとJSPあたりを使って開発することになるが、いずれにしても顧客管理システムは顧客を管理する目的でのみ存在する。Windows上で動作するWordやExcelのような単体アプリケーションの開発、LAN上のRDBMSにアクセスして企業の情報を処理するクライアントサーバーシステムの開発、Webサーバーとアプリケーションサーバーで多くの不特定多数の顧客に商品を販売するWebア

プリケーションの開発、これらはすべて、物理的に複数のマシンを必要とすることはあっても、論理的には単独のソフトウェアであるといつてよい。このような単独のソフトウェアを、ソフトウェア単位で請け負って開発／納品してお金をもらってきたのがシステム構築業界だ。

単独のソフトウェアを構築する要求は今後も決してなくなるだろうが、一方で開発することにそれなりの大義名分を持たせやすいソフトウェアはすでに作ってしまったという現実もでてきた。今や筆者の義理の両親が経営する零細企業でさえ、帳簿に紙など使わない。それなりのシステム投資ができる企業であればなおのこと、ヒト／モノ／カネに関連する部分でシステム化されていない場所を見つけるのが難しい。これはつまり、システム構築業界から見れば食い扶持を失いつつあることを意味する。

システム構築業界を支援するツール製品ベンダーも、高機能化競争の結果いつのまにかエンドユーザーが求めるものをはるかに超えた機能を実装してしまい、値段も高くなってそうそうたくさんは売れなくなってきた。加えて、そこまでの機能は必要ないと割り切ってしまうユーザー向けにオープンソースの非常に安価な製品が出始め、しかもそれが一定の機能を備えてしまったため、それらの製品で間に合わせるユーザーが増えてきた。ツール製品ベンダーも製品を販売するだけでは食えなくなりつつある。

そこで目をつけられたのが、単独で動作するアプリケーション群を統合するというニーズだ。在庫管理と顧客管理は連動したほうが意思決定がスムーズになるだろうし、販売データは新商品企画の参考にできるはずだ。企業活動においては、これら単独で動作するように作られたソフトウェア同士は、利用する人間が脳みそ（またはプリントアウト）でデータを運ぶという方式で連携している。これまでは人間たちを会議と称して召集し、データを運ばせなければならなかったのだが、データを運ぶ部分をシステム化できれば、単独で動作するように作ら